

仲秋の名月も過ぎると、肌に涼しさを感じるようになりませんが、そうした頃に、彼岸花が群生して咲きだします。

「どこからか一匹の蝶が飛んできました。

しかし彼岸花というのは球根で増える植物なので、蜜を出して花粉で媒介をしてもらう必要はないにもかかわらず、蜜を出しているのです。余力があるから蜜蜂や蝶に蜜をつくってあげているのです」

生物学者が書いた、そんなエッセーを目にしてから、自分の役割をきちんと果たしながら他のためになっている彼岸花は、まさに彼岸にふさわしい花だナアと思つていきます。

壇信徒の皆様には、おかわりございませんか。

この夏は殊の外お暑く、寝苦しい夜も例年よりも多かつたように思えます。



現在、涼風にホツと心を洗われるような日々なのではないでしょうか。

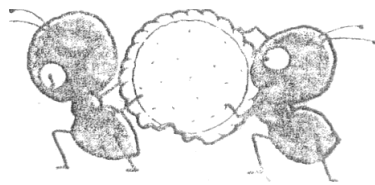
### 共生の世界

一度に三千匹のアリの大群が、ナイル川では、大きな塊になつて、移動するという話をききました。

お互いに離れないように、しっかりとつながりあつたアリの塊が、川に浮かぶと三分の一は、水面から上に出ています。残りの三分の二は水の中です。

つまり三千匹のうち、一千匹は水面の上に出ているので、生き残れても、残りの二千は、水の中で死んでしまうはずで

す。ところが流されていく途中で、今まで水面に出ていたアリは、次第に水の中に入り、



その代り、水の中にいたア리가今度は、水面に浮かび上がるのです。

このように交代しながら、もぐったり浮かんだりして、呼吸を整えていくのです。水面に出ている一千匹のために、他の二千匹は下にもぐって、その支えとなるのです。たつぷりと息を吸い込んだアリは、次に自分達が皆の下になり、下にいたア리가浮かび上がるように支えるのです。

そのようにして、三千匹のアリは殆んど犠牲もなく、どこかの岸に流れつくと、アリの塊が、少しずつくずれていき、地面を歩き始めるといふのです。

それにひきかえ、私達人間の世界はどうでしょうか。

すべての生き物は、共生きを果たす為、知恵を使い、助け合う力をもっていると思います。もしこのバランスを崩すと、その生命体は消滅するのだと思います。

自分の都合や立場ばかりを考えて、他人のことは、見て見ぬふり、知っていても知らぬふりをする事の多い中、お互い様、人生という短い期間、仲よく暮らせる知恵はないのでしょうか。そう考えた時、私達人間には、言葉というすてきな武器があることに気づきます。

「ありがとうと言われる様に、言うように」という句がありますが、最初に自身が、「ありがとう」と発することから、相手を生かし合う「共生きの世界・共に尊び合う世界」をつくり上げていくことが出来ると思われのです。

### 愛のことは

道元禅師は、

「愛のことはは自分をうらみ憎んでいる人の心も和らげ、よい友達をつくり、仲良くなる為にも極めて大切な根本である」と、おさとしになりました。思いやりの心のあ

ふれた言葉を聞いてみると、多くの人達の心は和やかなおだやかさで満たされます。しんそこ意地が悪いのではないのでしょうか、その人の口をかりて言葉が飛び出してくると、悪意としかとりようのないような言葉しかきかれない・・という人も、私共の周囲には、ごくたまにいます。そういう人は、誠に困り者ですが、かくいう私達も、いつもいつも気分がよい時ばかりではありませんし、何となく、くさくさして一日を送ることもままあります。そんな時自分の口から出る言葉が、自分自身でハツとする程とがったものであったり、人をとがめる言葉であつたりしがちです。「あつ、いけないナア」と反省の心が動くうちは、まだいいのですが、自分では気づかず言葉の上で、私達は、多くの人の心を傷つけてしまっています。

「よく結婚する前は、あんなに優しくかつた

主人なのに、—— つつた魚には餌をやらぬ——とばかりで、この頃は冷たくなって、優しい言葉一ツかけてくれなくなつて」と若い奥さんがこぼされます。

遠慮がなくなつた夫婦関係は、相手の関心を買おうと努力していた恋人関係と異なり、確かに、日常の会話ひとつにも心配りの欠けることがあるのでしよう。

これは夫婦関係に限らず、嫁姑、友人同士そして親子関係にもいえることであります。

私が結婚した頃の頃、妻に私の父（師匠）が「どんなに親しい間柄であつても、決して言つてはいけない言葉があるものだよ」と話したとのこと、妻は、何ら心に秘密をもたないことこそが本当の夫婦であり、又親子ではないのかと、心の隅に少々の反発心をもつてきいたようでした。当時、私も若く純真な妻に、余計なことを言つてくれるなよと、思いました。

しかし近頃は、この父の言った言葉のもつ意味が味わい深く胸にしみいるようになりました。

親しい間柄であればあるほど、そこには節度と守らなければならぬ礼儀があるはずであります。

「なんだ、この味付けは——  
お前の親が田舎者だから、お前もこんなに正油辛くしか、煮物ができないのか」と、夫から言われれば、誰だつて悲しくなりませう。そして思います。自分の味つけの悪さが、どうして実家の母親のせいになつてしまふのかしら・・・と。

「なんだ、この味付けは——  
いつもの料理上手のお前らしくないぞ」  
最後にチョット優しい言葉が入るだけで、同じ夫から叱られるにしても、受け取る者の気持ちは和らいでくるのであります。万事につけて、こんなものではないでしょう

か。誰だつて、ほめられて気持ちの悪い筈はなく、そんな言葉が明日への改善の足がかりになることだつてあるのです。

「愛のことばとは、すべてに暖い慈愛の心で接し、情け深い思いやりの言葉をきけることであつて、たとえば赤ちゃんを可愛いと思うような心を胸に一杯にしてご挨拶したり、お話しする優しい言葉のことである」とも、道元禪師は、ねんごろにお示しであります。

「愛のことばは、国をも動かす力であることを学ばなければならぬ」と、道元禪師は重ねて強く、おさとしになつておりますが、言葉のもつ力は、私共が考える以上に大きいのであります。

自分に投げかけられる言葉に、敏感な私達。いろいろな話しを聞く機会が多いだけに、私は「暖い思いやりのこもつた言葉をはける人でありたい」と思います。

お寺から

○ありがとうございます

― 勤勞奉仕 ―

八月七日、お盆を迎えるための準備の  
環として、境内、墓地の清掃を、御都合の  
つく有志の方々で行いました。

道路沿いの境内敷地内には、ジュース缶を  
はじめ、いろいろなゴミが投棄されていて  
今回はゴミ袋を片手に、その拾集も合わせ  
て行いました。

「いろいろな会合に出ると、

『きれいなお寺になったネエ』とか

『明るくて、お参りしやすいヨ』とか、

嬉しい評価をいただいて、鼻が高いよ」と  
言つて下さる檀家さんがふえて、何よりの  
ことと、私自身嬉しく思っています。

ここに御奉仕いただいた方の御芳名を御報  
告いたします。

(順不同・敬省略)

一寸木正治・杉山博倫・一寸木富子・小泉  
一義・小泉操・小野清・磯崎美範・一寸木  
艶子・磯崎泰美・篠崎勇・勝又晴美・杉本  
十三子・一寸木保・山崎節子・磯崎重和・  
磯崎恵美子・一寸木操・磯崎スエ子・鈴木  
タミ子・鈴木郁子・小林敏江・杉山正・磯  
崎繁幸・一寸木高男・高橋サダ子・磯崎初  
男・磯崎貴子・谷内久美子・一寸木昭司・  
高橋光成・一寸木健一・小石川啓輔・永松  
功次・木口康恵・杉山弘一・下田泰信・高  
橋信一・稲垣幸作・下田雅由・小泉直人・  
磯崎邦彦・一寸木和子・遊佐玲子・小宅ト  
シ子・下田一路司・一寸木勲・小泉スズ江  
・小泉郁子・小泉綾夏・小泉正章・山崎憲  
昌

ありがとうございます。

○お盆の精霊お迎えの法要

八月十三日、本年もお盆の精霊お迎えの



法要（棚経の代わりとなる法要です）を営みました。

昨年より、住職の前住地の玉宝寺梅花講の皆様が、賑やかな法要にしたいとの住職のお考えを受けて、この法要に参加して下さっています。

今年は、この春彼岸号「佛さま」にて、お盆のこの日だけでも、総世寺講でご詠歌をなさっておられた方に、

「御自分達の御先祖様をお迎えする法要ですので、御奉詠に御一緒なさいませんか」とのお誘いをしましたところ、小宅トシ子さんが御賛同下さり、御一緒のお唱えが実現しました。

本堂に響く鈴や鉦の音も、いつも以上に心地よくひびき渡るようでした。

### 住職閑話

頸動脈狭窄、腹部動脈狭窄と、心臓にステ

ントを入れた後、大きな手術が続いたものの、半年に一回だった追検査も、ここ二、三年は、年一回の検査で済んでいました。東京の慈恵医学大学病院まで行くのですが、それも年一回の検査とその後夫婦でおいしい物でも食べて帰るといいう、気楽な行事になっていました。

今年は、CTを撮影する造影剤が身体に合わず、アレルギー反応を起こし、あわやあちらの世界へ・・・ということとなりました。幸い病院でのことであり、すぐに救急室での処置、そのあとの手厚い看病をしていただけ、一命をとりとめたものの、一瞬にして身体中に発疹ができ、猛烈なかゆみそして呼吸困難となり、血圧が異常低下という経験をし、周囲の方々に多大な御心配をおかけしました。

今、日常の生活をしているものの、適度な休養をとることの必要さを感じる毎日です。